小説視写「高瀬舟」

森　鷗外

名前（　　）

▼智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に乗せられた。それは名を喜助と言って、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。▼護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から桟橋まで連れて来る間、この痩肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思った。▲

▼

▼

▲

視写　「山月記」

名前【　　】

中島　敦

▽今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駈けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。△

▽

△

、　。

小説視写「伸子」

宮本　百合子

名前（　　）

▼次の朝、伸子はいつものとおり元気を回復し、爽やかな気分で目覚めた。寝室のカーテンはまだ閉じたままであった。カーテンの隙間から、一本の震える細い金線のような光線が薄暗い部屋に射しこみ、化粧台の上の白粉壺に、小さい燃える松明のような閃きをつくっている。▼彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天気だ。少しもやっぽい空で、朝日が暖かく十月下旬の街路や建物に輝いている。伸子は、格別急ぎもせず顔を洗い、髪を結い、衣服を更えた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアのついたさっぱりした紺の服で広間へ下りて行った。朝の広間は澄んで清らかで、大理石の円柱や熱帯植物の鉢植が、埃一つない空気の中に納まっている。▲

▼

▲

▼

小説視写「坊ちゃん」

夏目　漱石

名前（　　）

▼親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。▲

小説視写「砂の女」　安部公房

名前（　　）

▽八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。捜索願も、新聞広告も、すべて無駄におわった。▽むろん、人間の失踪は、それほど珍しいことではない。統計のうえでも、年間数百件からの失踪届が出されているという。しかも、発見される率は、意外にすくないのだ。殺人や事故であれば、はっきりとした証拠が残ってくれるし、誘拐のような場合でも、関係者には、一応その動機が明示されるものである。しかし、そのどちらにも属さないとなると、失踪は、ひどく手掛りのつかみにくいものになってしまうのだ。仮に、それを純粋な逃亡と呼ぶとすれば、多くの失踪が、どうやらその純粋な逃亡のケースに該当しているらしいのである。

▽

▽

小説視写「檸檬」　梶井基次郎

名前（　　）

▼何故だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。▲

▼

▲

視写　「にごりえ」　樋口一葉

名前（　　）

▽物言わねば、狭き家の内も何となくうら寂しく、暮れゆく空のたどたどしきに、裏屋はまして薄暗く、あかりをつけて蚊やりふすべて、お初は心細く戸の外を眺むれば、いそいそと帰り来る太吉郎の姿、何やらん大袋を両手に抱えて、「母さん母さん、これをもらってきた」とにこっとして駆け込めり。△

▽

△

、「　」、

漢文視写

名前（　　）

【春望】　杜甫

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火三月に連なり
家書万金に抵る
白頭掻けば更に短く
渾て簪に勝へざらんと欲す

【翠岑を下る】　良寛

薪を担ひて翠岑を下る
翠岑の路平らかならず
時に息ふ長松の下
静かに聞く春禽の声

▽	▽	▽	▽		【翠			▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽		【春	
					岑を												望】	
					下る													
					】													
											△							
	△											△			△			
△									△					△				
		△	△															
								△										
					良								△				杜	
					寛												甫	
												△						